

# 公益財団法人日米医学医療交流財団 留学助成

## 研修報告書 (2021年度 助成者)

作成日 2021年 8月 30日

|           |   |
|-----------|---|
| 氏名 (フリガナ) | 金子博光 (カネコヒロミツ)                          |
| 研修先機関名    | Hawaii Tokai International College      |
| 研修期間      | 2021年8月17日 (火) ~ 8月21日 (土) オンライン (Zoom) |
| 大学名       | 大阪大学                                    |
| 学年        | 5年                                      |

医学科5年生の夏に、「Medical English Workshop」(以下、WS)にオンライン参加いたしましたので、ご報告します。

私が本WSに参加した主目的は、2022年前半(5年次後半~6年次前半)に予定している海外での臨床実習に向け、英語での病歴聴取や上級医へのケースプレゼンテーションの練習を行うことにありました。短い夏の5日間を本WSに投資することは、私にとっては一大決心でしたが、当初の期待を大きく上回り、投資対効果に見合った実りある研修とすることができました。

本WSの内容の一部をご紹介します。最初に、ケースプレゼンテーションの型を教えて頂き、それをターゲットに、必要な情報を取得する練習をしました。最初はTeam Based Learningでハワイ大学の医学生・指導医・日本人学生が入り混じって、必要な病歴聴取や鑑別診断・必要な身体所見や検査を挙げる練習をしました。次に、医学の知識がある学生(日本人医学生、及び、現地医学生)に患者役になってもらって病歴聴取します。続いて、指導医にケースプレゼンテーション(病歴サマリ・鑑別・対応策とプランを含む)し、フィードバックを貰います。この病歴聴取-ケースプレゼン-フィードバックというサイクルを期間中に、10回以上は行います。これにより、だいぶ慣れたようです。最終日には、好きなケースを2つ選び、参加者・指導医の全員の前でプレゼンします。とてもChallengingでしたが、しかし実は、工夫や改善の余地がより大きいのは、英語よりも、むしろ医学(特に、鑑別の列挙・プランニング)の方にある、と改めて気づきました。本ワークショップにおけるフォーカスは「英語の言い回しの自然さ」などよりも、むしろ「医学」に置かれています。患者に対して実践する前に、「安全な場所」、「教育的な配慮の下」、で行うのが眼目です。

卒前医学教育について感じたことを述べます。本WSを通じ、講師の先生方や現地のハワイ大学の学生の方々から米国の医学教育の一端を伺いました。日本とはだいぶ違うなと思ったことの一つに、今回のWSで経験したような、病歴聴取~臨床推論・プランニングを行う機会が、大学の1年生の時から豊富にある点が挙げられます。日本の大学はこの点では、正に多様性が大きく、伝統的な教育スタイルを重視する大学もあれば、Globalトレンドを巧みに取り入れた先取の気風に満ちた大学もあるようです。しかし、各大学の学生が所属大学それぞれの教育体制に一喜一憂する必要はないのだな、ということに医学生後半になってようやく気付くようになりました。学外には、本WSをはじめとして、多種多様なActivityや勉強会があります。実際、今回の参加者の中には、何度か別の機会にお会いした方々もちらほらおりました。そして、そのようなActivityを支援してくださっている、医師や有識者の方々が国内外に少なからず存在します。日本の卒前医学教育の主戦場はおそらく、「各大学で閉じたもの」から「学外・大学横断的な開かれたもの」へと大きく遷移する予感があります。目下のパンデミックは、オンライン化を促進し、この傾向を加速しているのを実感もします。少なくとも医学領域では、各大学個別に教育コンテンツを開発して提供するという意義はもはや大きくはなく、むしろ、大学横断的に質の高いコンテンツを学生の理解度やニーズに応じて提供することが強く求められているように感じます。さらには、学生が自ら提供側と需要側の両方を兼ねた草の根の活動も広がっており、卒前医学教育により豊かな土壌を形成しつつあるようにも思います。

本WSでは、オンラインの素晴らしい気軽さと、そうはいつでも、対面式での再開を切望する気持ち、との両方を味わいました。本WSを通じ、自室に居ながらにして、参加者や講師の方々の多様なバックグラウンドや将来に対する思いをお伺いすることができたのは幸いでした。これらの、講師の方々・参加者同士の交流は、私の期待をはるかに上回り刺激的でもありました。しかしながら、もしも現地開催されていたなら、現地の講師・学生・参加者学生の間での自由な交流がより促進され、さらに充実したものになっただろうとも想像します。この点でも、本WSが是非、現地開催で再開されることを心から祈念致しております。

今回のWSを通じて得られた学び、そして講師や参加学生の方々とのご縁を大切にしつつ、今回の体験を自らの目指す将来像に向けた布石として活かしたいと思います。

改めまして、講師の方々・参加者の方々・スタッフの皆様に、厚く御礼を申し上げます。